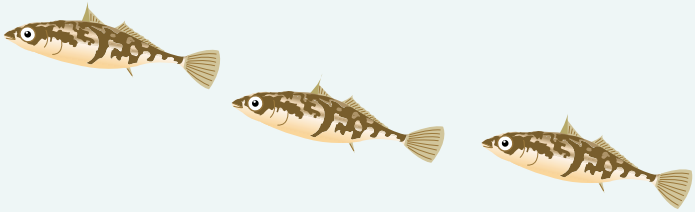
水の大切さを人々に伝える浮気地区のハリヨ。

いまや幻の魚とさえいわれるハリヨの保護に取り組んでこられた守山市浮気地区の元自治会長、西村三右衛門さん。ハリヨ保護に向けるその熱い想いを語っていただきました。

浮気自治会元会長　西村三右衛門さん（左）
現会長　大西清明さん（右）



もともと浮気地区では家屋のまわりを流れる水路（里中川）にたくさんハリヨが生息していました。その水を生活用水として使っていましたから、子供の頃はお風呂の湯船にゆで上がったハリヨが何匹も浮いていたりしましたね（笑）。ところが、昭和30年頃、近隣の湧き水が枯れてしまったのを契機にハリヨは姿を消しました。もちろん、水路の水もヘドロのように汚れてしまいました。そんな里中川をきれいにしようと昭和63年、地下水のポンプアップを試みました。その結果、なんと毎分600リットルという豊富な地下水が蘇ったのです。そして、ある日、美しさを取り戻した水路の中に3本ほどの藻を見つけました。それは、よく見るとハリヨがいた頃に数多く自生していた藻でした。その時、私はハリヨを呼び戻すことができるのではないかと直感したのです。早速、ハリヨの権威であり、当時、京都大学で教鞭をとられていた森誠一先生に連絡をとり、ハリヨのすめる環境づくりを丁寧にアドバイスしていただきました。それが今日のハリヨ保護の第一歩でした。

一般にハリヨは4～6月の間に産卵するといわれていますが、浮気のハリヨは寒中にも産卵している気配があり、今年の冬、そのことを森先生に告げると「西村さん、とうとうやりましたね」という言葉をいただきました。本来、ハリヨは通年産卵する習性をもっていますが、環境が整わないと産卵期間が3ヶ月くらいに絞られるそうです。すなわち、年間を通して水温が13℃に保たれる浮気の水路はハリヨにとって理想的な環境といえるのです。近年は、情操教育の一環として市内の幼稚園や保育園から子供たちが水路を訪れることも多く、ハリヨが泳ぐ姿を見ることで、水の大切さや自然の尊さを感じてくれたらと思います。いま、浮気の人々の間では、通年産卵する浮気のハリヨをギネスブックに載せようという声が上がっていて、年間データを集めているところです。ただ、申請文をすべて英語で書かないといけないのが大きな問題になっています（笑）。

前頁へ　次頁へ